

近代陶磁器の生産と流通～統計資料にみる山口県の陶磁器生産～

河田 聡

はじめに

鳥山民俗資料館河田です。よろしくお願いします。

私の方からは「近代陶磁器の生産と流通～統計資料による山口県の陶磁器生産～」という題で、報告させていただきたいと思います。

1. 統計上の陶磁器生産

まず統計上の陶磁器生産ということで、統計上の窯業というものは何かということを説明したいと思います。統計上の窯業というのは、陶磁器生産、瓦生産、煉瓦生産、ガラス生産、そしてセメント生産など、非金属原料を高熱処理してつくる工業である、という風にされております。その生産に窯を用いることから、一般的には、窯業というふうにいわれております。

その中でも特に、陶磁器生産というのがどういうものかということを説明したいと思いますけれども、当然、時代が変われば、どんどんこの陶磁器生産に含まれる生産品というものが変化していきます。明治時代はまず装飾品、家具、飲食器、玩具、その他というふうに分類されていたものが、大正時代になると、装飾品と家具がまとめられて、装飾品及び家具、一般的には装飾品と書かれます。そして飲食器、碁子、玩具、工業製品、土管、その他という風に分類されていきます。

これらをひとつひとつ見ていきますが、まず装飾品というものはどういうものかというのと、例えば一般的に、花瓶、壺、置物など、そういったものが装飾品に分類されます。

次に家具というのは、水甕や味噌甕など、先ほど田畑先生から説明があったような大きな製品ですね。ああいうものが、一般的に家具といわれます。あとはこたつもです。昔、木炭や練炭などを使う、陶器でつくられたこたつがあったのを御存じの方がいらっしゃると思うんですが、それも家具になります。また肥溜めのようなものも、一般的には家具という風にいわれるようです。

飲食器に関しては、碗、皿、鉢、徳利など、いわゆるキッチンにあるようなものが、飲食器になります。

次に碁子です。碁子というのは、あまり聞かれたことがないかもしれません。電柱の上の方を見ると、磁器で作った白いものが沢山並んでいるのを、見たことがある方もいるかと思うんですが、これが碁子というものです。電線と支柱を絶縁するために必要な器具で、非常に、耐久性と強度、そして絶縁性が求められるため、磁器で作られるようになります。当然ですが、明治時代というのは、電気や電信というような、インフラ整備のための工事がどんどんおこなわれます。その中でこの碁子というものが非常に必要になってくるため、それでたくさんつくっておりました。これが碁子ですね。

そして次に玩具です。玩具というのは、いわゆる土人形のようなものを想像して頂ければと思います。お祭りや、縁起物として神社でもよく売られています。あとは鳩笛のようなものや、土鈴のようなものも玩具です。玩具というのは、型を作って簡単に作れるので、陶芸をされる窯場では副業的に

よく作られてたようです。

次に工業製品です。工業製品というのはどういうものかという、例えば衛生陶器というものがあります。これは、洗面台や浴槽、便器などです。その製造で歴史的に有名な会社といえば、大正6年に小倉で創業された「TOTO」(株)です。当時は「東洋陶器」ですね。

その他には、タイルです。こちらの方は「INAX」という会社がございますよね。これが愛知県の常滑に、「伊奈製陶所」という名前で、大正10年頃に創業されておりますが、元々は土管やタイルなどを作るメーカーでした。それから、山口県で有名なのは、小野田の硫酸瓶です。これが非常に有名な工業製品でした。

次は土管です。山口県では末田や堀越などで、非常にたくさんの土管が作られておりました。一般的に、土管は、明治時代・大正時代以降のインフラ整備の中でたくさん使われます。下水工事や、排水事業の、たとえば田んぼの暗渠排水のようなものなどです。このような利用のために、土管生産というのは非常に重要で、陶磁器生産の中では非常に多く作られました。この土管は、あまりにもたくさん作られていくので、大正時代に入ると統計上の陶磁器生産という項目から別分類にされ、先ほど言った瓦や煉瓦と同じように、土管製造という別分類になっていきます。それだけ、土管というのは全国的にたくさん作られた産業になります。

そして最後に、その他です。その他というのは例えば漁具で作られる重りですね。陶器でつくられている重りを見たことがある方もいらっしゃると思うんですけども、そういうものや、蛸壺など、いろんなものがその他に分類されていきます。

このようにみると、明治時代と大正時代で統計分類上大きく違う点は何かという、明治時代では装飾品や家具など、どちらかというと個人の需要に伴うようなものが陶磁器生産に多い。それが大正時代になると、インフラ整備に伴って工業的に使われる物、作られる物など、そういうものが分類の中に入ってくる。これがひとつ、明治時代と大正時代の特徴だというように思います。

2. 国内陶磁器生産統計について

では、実際に図1「国内陶磁器生産額統計」についてみてまいりたいと思います。これは生産数の推移を表したものですけれども、全体的に見てわかるように、右肩上がりに非常に成長しております。その中で、いくつかポイントの点がありますので、今回の分析では、全体の変遷を見るという手法だけではなく、意味のある年代をいくつかサンプリングして、対比させることで、生産の傾向をとらえていこうというふうに考えております。

そのサンプリング年代の確認ですが、今回は、明治39年(1906年)と、大正12年(1923年)、この2つの年代を比較検討してまいりたいと思います。

まず、明治39年(1906年)というのはどういう年かという、日露戦争による戦争特需の時期があること。そのため生産額が上昇し、非常に成長した時期だというふうにお考えください。

しかし、そのあと戦後の恐慌が始まりまして、ここで需要が一気に落ちて景気が悪くなる。ですので、この最初のポイントの明治39年というのは、どちらかというと明治時代を通じて、非常に景気の良かった時期だという風にお考えください。

次に、大正 12 年（1923 年）ですけれども、これは日本経済が大きく進展した時期ですね。ここの辺大きく成長しています。しかし、第一次世界大戦による大戦景気が終了したあとに、今度は大正 9 年あたりから、ここで一気に落ちていきます。そのあとに V 字的に回復する。回復したあとの年代というのが、この大正 12 年です。一般的には、非常に景気が悪くなっていつている時期ですが、陶磁器の生産に関しては、この時期に V 字回復している。そういう時期だという風にお考えください。この 2 つの年代をポイントとして、全体の陶磁器生産というものを考えていきたいと思っております。

3. 国内陶磁器生産品の輸出について

次に、図 2「国内陶磁器生産額割合表」について見てまいりたいと思います。先ほどのサンプリング年代にある、明治 39 年、大正 12 年を比較していきたいと思います。下の方が明治 39 年、上が大正 12 年です。当然のことながら、大正 12 年のほうが、明治 39 年に比べてはるかに生産額は多くなっております。注目していただきたいのは、国内消費と輸出の割合です。明治 39 年の段階では国内消費に対して輸出が多い。これが明治 39 年の陶磁器生産の特徴です。赤色の方が輸出で、下が国内消費ですね。それが上の方の大正 12 年を見てみましょう。こちらの方は国内消費が非常に多い。そして輸出が少なくなっている。これがこの輸出割合からみた、陶磁器生産の比較という感じです。またこの辺の原因については、さらに詳しく話が出来ればと思うんですけれども、以上、輸入に関してはこのように、明治時代と大正時代では逆転しているというのがわかります。

4. 商品別陶磁器生産割合

次に、図 3「国内陶磁器生産額種別比較表」について見ていきたいと思います。これも明治 39 年、大正 12 年の比較になります。

明治時代と大正時代は、装飾品、家具というのがまとめられて、ひとつになっております。飲食器はそのままで、そして大正時代にはあらたに碁子の生産が始まっております。そして玩具、その他というのが分類されて、工業製品、その他、が分かれております。生産額では、大正 12 年の方が、非常に成長しております。

次に陶磁器生産を、生産額ではなくてパーセントでみていきたいと思います。当然、大正時代には、インフラ整備のための工業用品などが、増えていつているのがわかると思います。碁子などの工業製品が大正時代には増えております。それに対して明治時代というのは、装飾品や家具、飲食器など、全体的には個人消費のものがわりと多い。ただ、これを見ていただければわかるんですが、工業製品が多くなったといっても、飲食器は、明治時代も大正時代も、生産の中で非常に量が多い、ということをお理解いただければと思います。これが、全国的に見た陶磁器生産の一つの特徴だという風にお考えください。

次に、図 4「全国飲食器生産額統計表」ですね。先ほど中心は飲食器という話をしましたが、この飲食器の生産額に対しての統計表をみてまいりたいと思います。

同じように明治 39 年、ここですけれども、最初に話をしたように、ここで日露戦争後の戦争の特需によって上昇したものが、そのあと恐慌によって下落しているというのは同じ流れですね。その後

どんどんまた生産は上昇します。そして世界恐慌によって、需要はどんどん下がります。そしてV字的に回復する。この辺は陶磁器全体の流れとは同じ様な状況です。

ただひとつ違うのが、最初の陶磁器全体の流れでは、このV字回復は最初が一番多いくらいの位置まで回復していたんですけども、飲食器に関しては、そこまでは回復してない。これを覚えておいていただければと思います。

次は、図5「主要都道府県生産額比較表」を見ていきたいと思います。まず、明治39年を見ていただければわかると思うんですけども、例えば今現在、有田焼などはすごく知名度が高いようなイメージがあります。ですが、この明治39年の段階を見てみますと、全体のほぼ60%が、愛知県、岐阜県で占められているというのが特徴です。佐賀県は全体の6%しかなく、京都よりも下というのがわかります。そして、山口県を見てみましょうか。島根県と同じぐらいの生産力をもっております。山口県の上には石川県や愛媛県、福島県などがございます。全体的には、山口県の実生産額は全体の1%ぐらいですね。そのぐらいの生産力があります。それから、大正12年もやはり同じように、愛知県、岐阜県が非常に強いんですね。そして京都、佐賀県は生産額がどんどん落ちてきている状態です。実は愛知、岐阜というのは、明治・大正時代を通じてほぼ1位2位独占してるような状態で、2つの県で全国の陶磁器生産額の50%以上を誇っているというのが、明治・大正時代の陶磁器生産の特徴になります。

山口県を見てみましょう。山口県は、非常に生産額を伸ばしておりまして、島根県や愛媛県、神奈川県などを抜いて、福島県に迫るぐらいの勢いの生産額を誇っております。全体ではやはり1%ぐらいなんですけれども、あまりにも愛知県や岐阜県、京都が多すぎるので、1%にみえていますが、全体的に、全国でみれば、非常に生産額は多い方になります。

5. 統計書の中の山口県内陶磁器生産

次に、図6「山口県の陶磁器生産額統計表」を見ていきたいと思います。山口県も明治39年に、同じく戦争の特需で生産額がどんどん上がったものが一時的に下がる。そして、そのあと紆余曲折色々あるようなんですけれども、一応右肩上がりに上っていく。しかし、山口県の場合は、世界恐慌の影響を受けて、一気に落ちるような状況があまりないというのが、この表を見ていただければわかると思います。これが山口県のひとつの特徴なのかなというふうに思います。このひとつの原因は、もしかすると、輸出に頼ってないという生産の状況があるかもしれません。

次に、図7「山口県生産種別比較表」を見ていきたいと思います。左側が明治39年、そして大正12年ですね。装飾品、家具というのがまとめられて、生産額が割と増えていますが、ほぼあまり変わらない状況です。飲食器というのは、総額で約2万円ぐらい増えていますね。また、わずかですが、山口県内でも碁子の生産が始まっています。玩具というのは、当初は少なかったんですが、わりと作られるようになっていきますね。あとは土管、工業製品、その他というのが、非常に多くなっております。次はパーセントでみていきたいと思います。明治39年では、全体の生産の中で約50%が、家具や装飾品、飲食器などを生産していた。それが大正12年には、個人消費向けのもの、要するに飲食器や、玩具、装飾品などは、全体の僅か10%です。そして、それ以外の、土管などの工業製品の需要が非

常に多く、その割合をのばしている。これは、山口県の陶磁器生産が、個人消費から、どちらかという工業製品に変わっていくということですね。これも特徴ですので、これもちょっと覚えておいていただければと思います。

次に、図8「山口県飲食器生産額統計表」を見ていきたいと思います。これは飲食器に関してのみです。明治39年には、やはり同じように右肩上がりに上がって行って、そのあと下がりますね。そしてだんだん上がっていきませんが、大正9年の不況から、ここで飲食器の生産が一気に落ちます。そしてここでわずかにV字回復する。この状況が、山口県の飲食器の生産です。ですので、山口県は、大正時代に入った時に、割と飲食器の生産をしてたんですけれども、この大正9年の不況で、一気に生産額を落としていく。これが、山口県のもうひとつの大きな特徴です。

大正9年の不況は、どちらかといえば第一次世界大戦後のヨーロッパが原因ですが、山口県は飲食器の輸出をヨーロッパ向きにはしておりません。では、ヨーロッパに対して輸出をしてない山口県がなぜこういった風に、生産額を落とすかという、ヨーロッパが不況になったことで、日本各地の輸出業者が、海外向けから国内にシフトして行って、その製品がどんどん国内に入ってくる。それらの飲食器が入ってくることで、競争して負けていってしまうという状況が考えられます。それで山口県は、生産額を非常に落としていったんじゃないかという風に考えています。

次に、図9「山口県郡別陶磁器製造戸数統計表」を見ていきたいと思います。明治39年と大正12年の比較ですけれども、熊毛郡は元々5軒あったものが0軒になってます。都濃郡は7軒が4軒ですね、佐波郡は若干増えて113軒から129軒ですね。吉敷郡は37軒に増えております。厚狭郡も増えておりますね。そして、豊浦郡は8軒から6軒に減少しております。大津郡は変わらず。阿武郡はわずかに減っている。全体としては、陶磁器の生産戸数は増えているんですけれども、一部製造戸数が下がってる郡もあるという状況です。

今度は、図10「山口県郡別飲食器生産額統計表」を見ていきたいと思います。明治39年と大正12年の比較ですけれども、飲食器を作っていた熊毛郡は、大正12年には作らなくなっております。都農郡は減少しておりますね。佐波郡はかなり上昇しております、吉敷郡も上昇しておりますね。厚狭郡は0になっております。ただ厚狭郡の場合、ちょっと統計書上、間違いもあるんじゃないかとも思われます。厚狭郡というのは小野田で非常に色んなものを作りますので、もしかしたらすべて、工業製品にまとめられてしまってるのかもしれないと思うような状況もあり、ここは注意しないといけないと思いますが、一応統計書上は、0になっているという状況です。豊浦郡は、わずかに増えております。そして、大津郡も増えております。阿武郡はわずか減少しておりますね。

6. 豊浦郡内の陶磁器生産

次に、図11「豊浦郡陶磁器種別生産比較表」を見ていきたいと思います。ここでいう豊浦郡というのは、現在の豊浦郡と長府や小月を含みます。ただし、王喜や吉田などの地域は含みません。また、旧下関、赤間関市を除いた部分が、旧豊浦郡内になります。

装飾品、家具は、明治39年には作っていましたが、大正12年にはわずかな生産となっております。飲食器に関しては、先ほども説明しましたが、わずかに上昇しております。そしてその他とい

うものが、非常に増えている。そして土管製造も始まっているため、全体額としては上昇しているんですけども、一部にやはり減っていったものがある状況です。

次に、生産額の割合をパーセントでみてまいりたいと思います。非常にこれはおもしろいデータなんですけれども、明治 39 年の段階をみてみましょう。豊浦郡の場合は、飲食器、家具、装飾品など、100%個人消費向きのものしか作ってなかったのが、大正 12 年になると、飲食器というのが 27%、装飾品はパーセント的にはほぼ 0%、そして土管やその他といったものの生産額が増えていっています。この場合のその他というのは、工業製品を作っていたような状況が考えられると思います。

次に、図 12「山口県郡別飲食器生産割合表」というのを見ていきたいと思います。明治 39 年ですが、一番飲食器をたくさんつくっているのは阿武郡ですね。そして第二位が豊浦郡で、わりと頑張っている状況です。次に、大正 3 年ですが、ここで、山口県内でもっとも飲食器を作っていたのは、実は豊浦郡だということがわかると思います。しかし、大正 12 年になると、豊浦郡はわずかに生産額を下げたといって、その代わりに佐波郡などが上昇していきます。そして、大正 14 年を見ても、豊浦郡では、ほぼ生産がストップし始めているなという状況で、他とくらべて著しく生産額を落としていっております。

7. 下関を中心とした陶磁器流通について

次に、図 13「下関港陶磁器取引先比較表」を見ていきたいと思います。明治 39 年と大正 12 年の比較になります。明治 39 年の段階では輸入先として、たとえば大阪や筑前、石見、三河、伊勢、県内もありますね。陶器に関しては、いろんな地域から、輸入しております。そして磁器に関しても肥前、美濃、尾張、伊予、県内各地からも輸入している。そして、下関の間屋さんが、仕入れたものを今度は北海道や九州、県内の小売や問屋などに販売している。磁器に関しても、北陸、北海道、九州。そして韓国にも輸出している状況がみえます。しかし大正 12 年になると、輸入元は大阪と門司がほとんどですね。そして輸出先も門司、朝鮮各港、そして外国、このような変化がございます。これは、ひとつには明治 39 年の段階ではまだ問屋さんが県外各地に独自の流通のルートをもっていて、そこから仕入れたり、別のルートに出したりということをやっていた。それが、大正 12 年になると、ほとんど門司を介してしまっている状況です。要するに、門司が力をつけてきて、その門司の間屋さんに流せば売ってしまうという状況で、ほとんど問屋さんが、独自のルート開発しなくなっているような状態が、大正 12 年にはあるんじゃないのかなというふうに思います。

次に、図 14「下関駅陶磁器貨物一覧」です。こちらは明治時代のデータが無いので、大正 12 年だけになるんですけども、注目していただきたいのは到着便です。これは、生産額じゃなくて t 数で記載されています。これを見ると、発送数はわずか 1,000 t を超えております。しかし、下関駅から発送する量をみてみましょうか。120 t です。非常に少ないですね。これはやはり、下関市にほとんど物が入ってくるわけなんですけれども、そこから流通させるというような感じではなくて、下関駅に入ったもののほとんどが、周辺地域や下関港からまた門司に送られているというような状況がわかると思います。

全体的に統計上のデータを見ていったんですけども、ちょっとまとめていきたいと思います。ま

ず、全国の陶磁器の生産額というのは、明治・大正時代を通じてひとつ大きく成長しているという事実がございます。全国的には、工業製品を中心としたインフラ整備に使用される製品の生産が増加しますけれども、生産の中心は飲食器である、ということです。

山口県の場合を考えると、明治39年には家具や、装飾品、飲食器など、個人消費のための製品が生産額のうち約50%程度ありましたが、大正12年になると、これらを合わせても全体額のわずか10%と、個人消費のものが生産額的に非常に減少している状況がわかります。つまり山口県の陶磁器生産の中心は個人消費のものではなく、どちらかという工業製品や土管などのインフラ整備ですね。企業や工場など、そういったところの依頼で作られたものが、生産の中心になっていくということがわかります。また山口県内の、飲食器の生産額の減少についてですが、これは大正9年の世界恐慌の影響というのが、非常に大きいと考えております。先ほど説明しましたが、山口県産の製品の輸出の減少ということではなくて、全国の輸出業者、特に、愛知や岐阜などの業者さんが、海外向けから国内向けにシフトしたことが影響していると思います。これは、下関駅の取扱い貨物の到着分の陶磁器の多さからも考えられると思います。

豊浦郡に関しては、明治39年の段階では、ほぼ100%が個人消費向けの製品であった事がわかります。これはやはり、山口県豊浦郡の特徴です。それが大正時代に入ると、その後は土管などの工業的なものを作るようになっていってるという状況です。同時に下関港に関しても、明治39年の頃には、県内や県外などいろんな地域から集めてきた陶磁器を、北海道、北陸などの地域に輸出していた。そういう独自のルートを持っていたものが、大正時代になると特に門司が中心になり、下関は中継的な地域になっていってしまっているというのが、ひとつの大きな特徴だと思います。

このような状況をみると、大正時代、豊浦郡にたくさんあった窯がなぜなくなったか、ということを考えていく場合にも、下関港や下関駅などの機能がだんだん失われて、どちらかという中継的な地域になっていったことが、影響していったことも考えられると思います。

以上、私の方からの報告はここで終わらせていただきたいと思います。どうもみなさんご清聴ありがとうございました。

《参考文献》

- ・『農商務統計表』農商務省総務局統計課 1886～1923
- ・『下関市統計年表』下関市役所 1924～1931
- ・『赤間関市統計書』赤間関市 1897
- ・『山口県統計書』山口県内務省、山口県知事官房統計係 1891～1935
- ・『山口県勸業年報』第二回～第二十八回 山口県内務省 1887～1911
- ・『山口県商工案内』山口県商工課 1936
- ・『関門釜幡若倉 実業名鑑 日本之関門編纂』下関瞬報社発行 1918 柳広一
- ・『山口縣商工人名録』山口県内務部 1910
- ・『防長案内』中国総合畜産共進会山口県協賛会編纂 1908
- ・『関門日日新聞』関門日日新聞社 1911～
- ・『馬関毎日新聞』馬関毎日新聞社 1902～
- ・『小月いろは新聞』藤永新聞舗 1907～
- ・『長州育英』長州育英社 1906～
- ・『大日本窯業協會雑誌』Vol.1～54 大日本窯業協會 1892～1946

- ・『日本近世窯業史』大日本窯業協会編 1922
- ・『近代日本の陶磁器業』宮地英敏 名古屋大学出版会 2008
- ・「明治後期における陶磁器業の発展と同業組合活動」『経営史学』第30巻第2号 1995 大森一宏
- ・「近代中国における日中陶磁器」馮 赫陽 『或門 No16』近代東西言語文化接触研究会 2009
- ・「明治前期における肥前陶磁器業の輸出戦略」山田 雄久 『経営史学』第30巻 第4号 1995
- ・『藩陶器専売制と中央市場』山形万里子 日本経済評論社 2008
- ・『博覧会の時代—明治政府の博覧会政策』国 雄行 岩田書院 2005

図 1 国内陶磁器生産額統計表

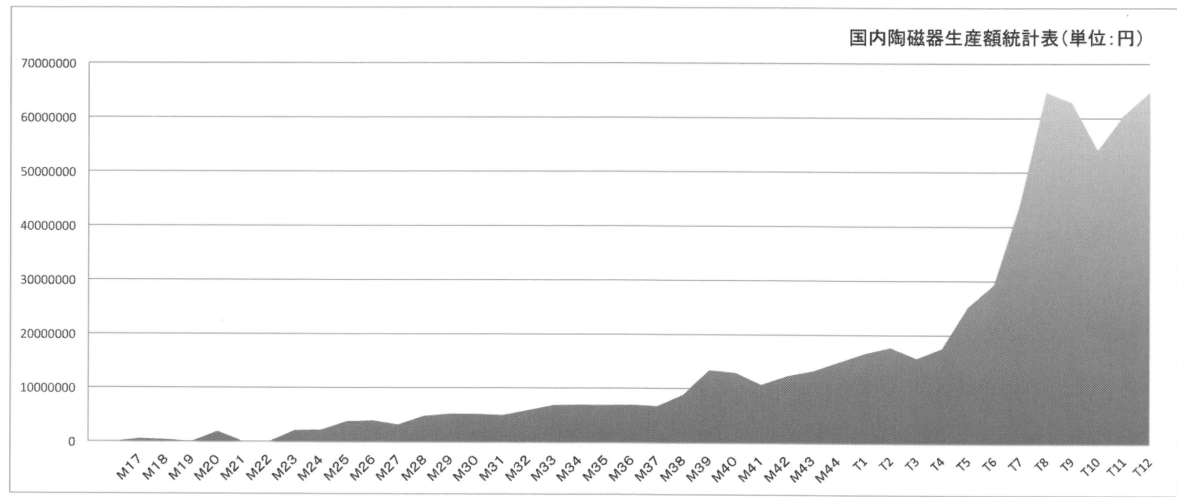


図 2 国内陶磁器生産額割合表

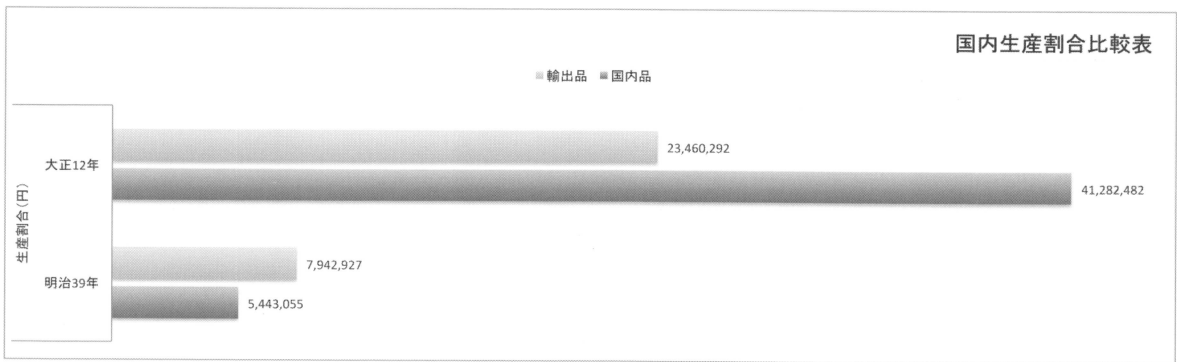


図 3 国内陶磁器生産額種別比較表

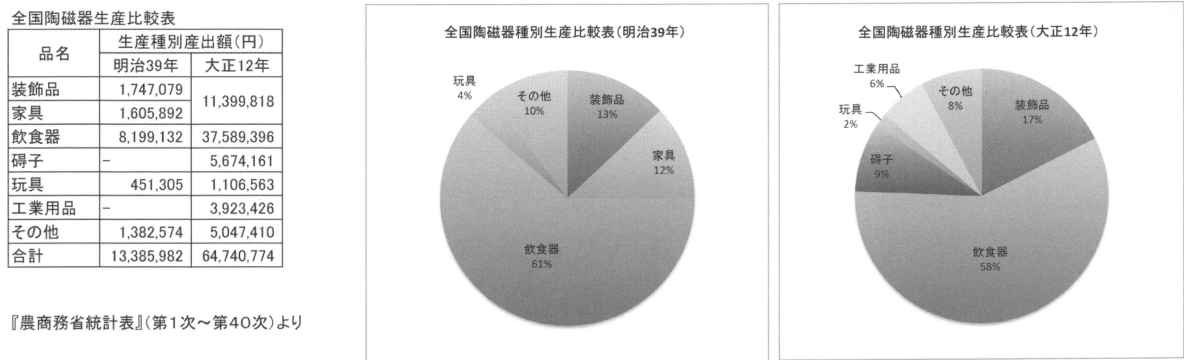


図 4 全国飲食器生産額統計表

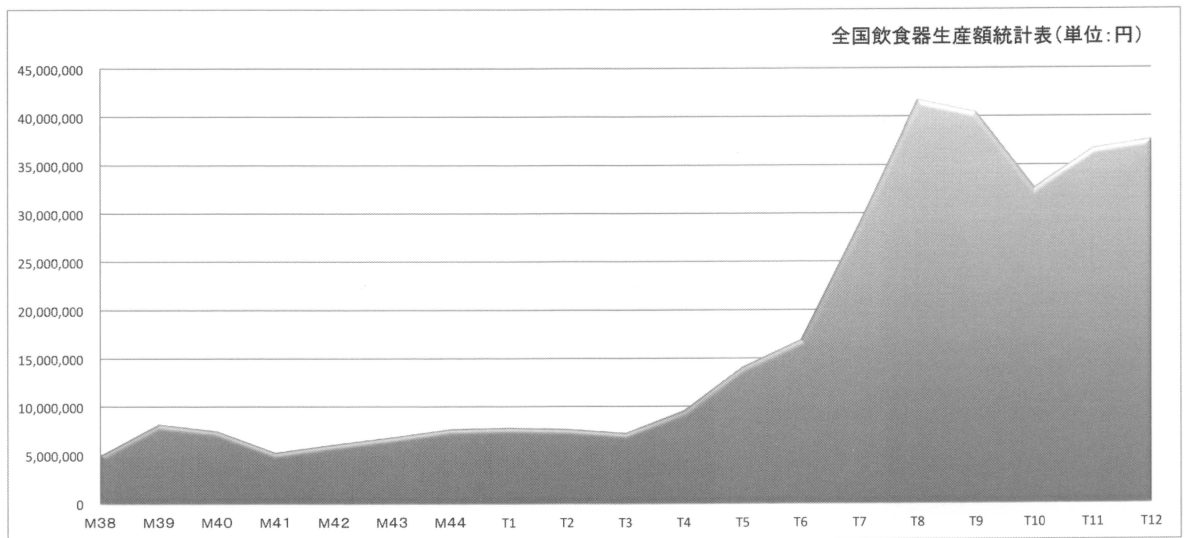


図 5 主要都道府県生産額比較表

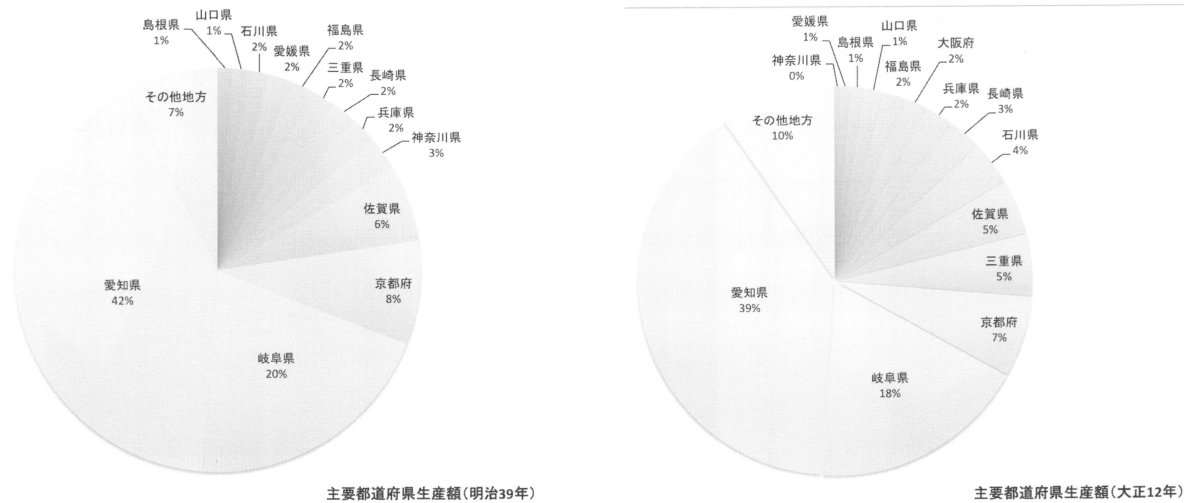


図 6 山口県の陶磁器生産統計表

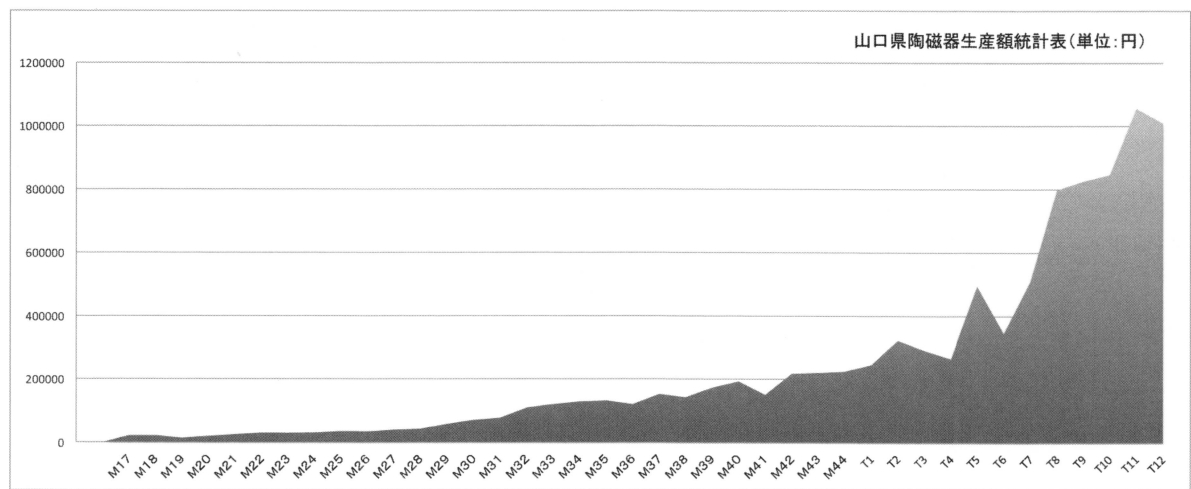


図 7 山口県生産種別比較表

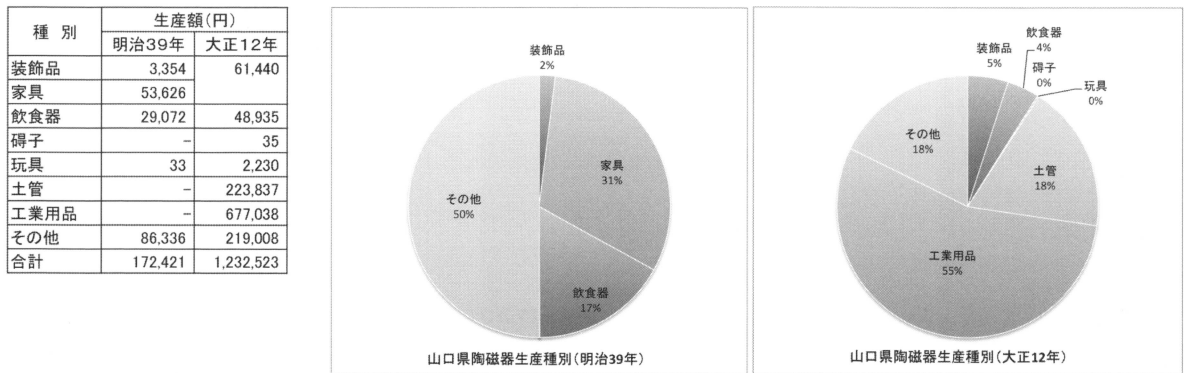


図 8 山口県飲食器生産額統計表

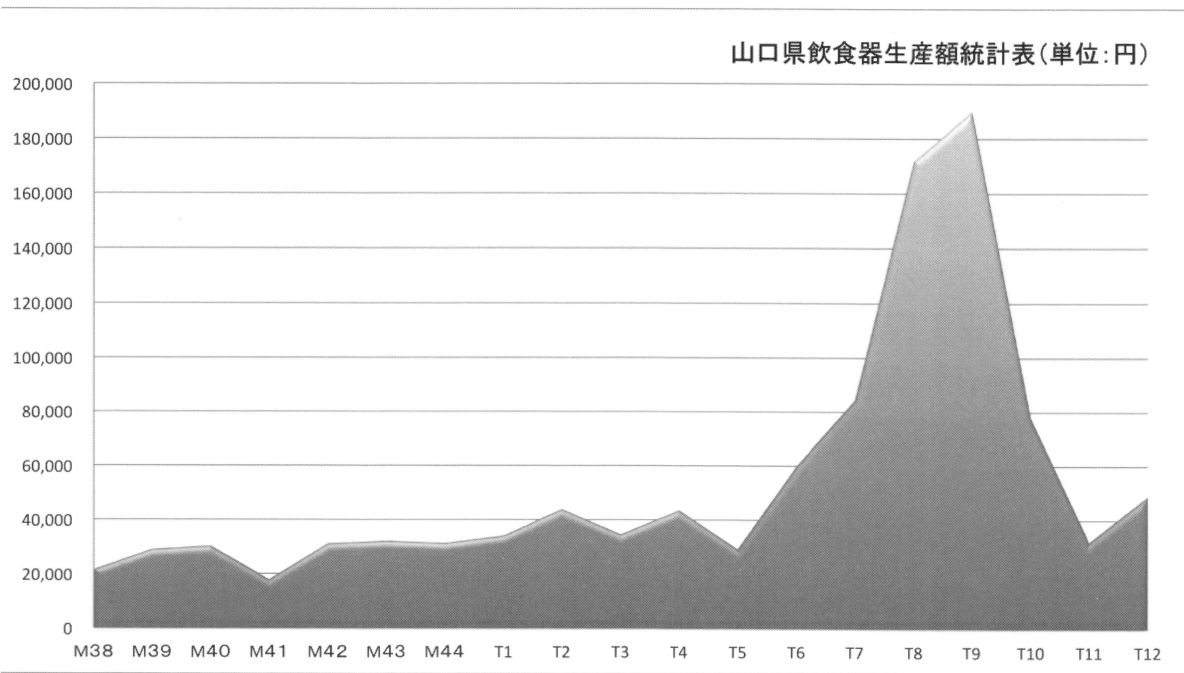


図 9 山口県郡別陶磁器製造戸数統計表

郡区名	製造戸数(戸)	
	明治39年	大正12年
大島郡	-	-
玖珂郡	-	-
熊毛郡	5	0
都濃郡	7	4
佐波郡	113	129
吉敷郡	21	37
厚狭郡	13	20
豊浦郡	8	6
美禰郡	-	-
大津郡	8	8
阿武郡	15	14
下関市	0	0
計	190	218

図 10 山口県郡別飲食器生産額統計表

郡区名	飲食器生産額(円)	
	明治39年	大正12年
大島郡	-	-
玖珂郡	-	-
熊毛郡	200	-
都濃郡	2,465	1,630
佐波郡	700	15,820
吉敷郡	2,086	5,145
厚狭郡	500	0
豊浦郡	8,875	9,140
美禰郡	-	-
大津郡	2,030	9,000
阿武郡	12,216	8,200
下関市	-	-
計	29,072	48,935

図 11 豊浦郡陶磁器種別生産比較表

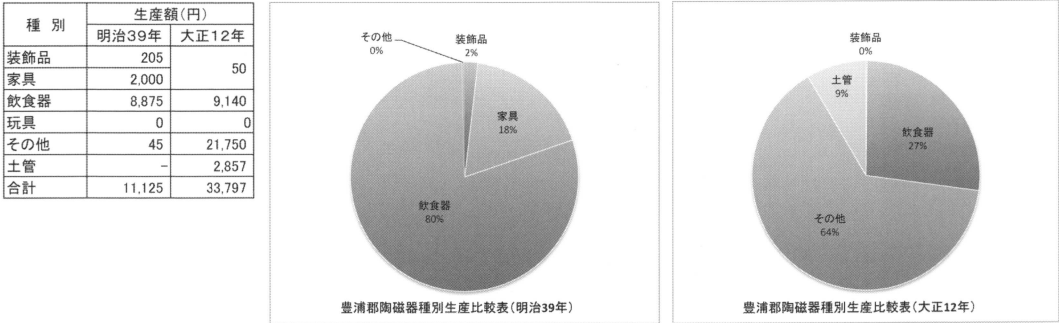


図 12 山口県群別飲食器生産割合表

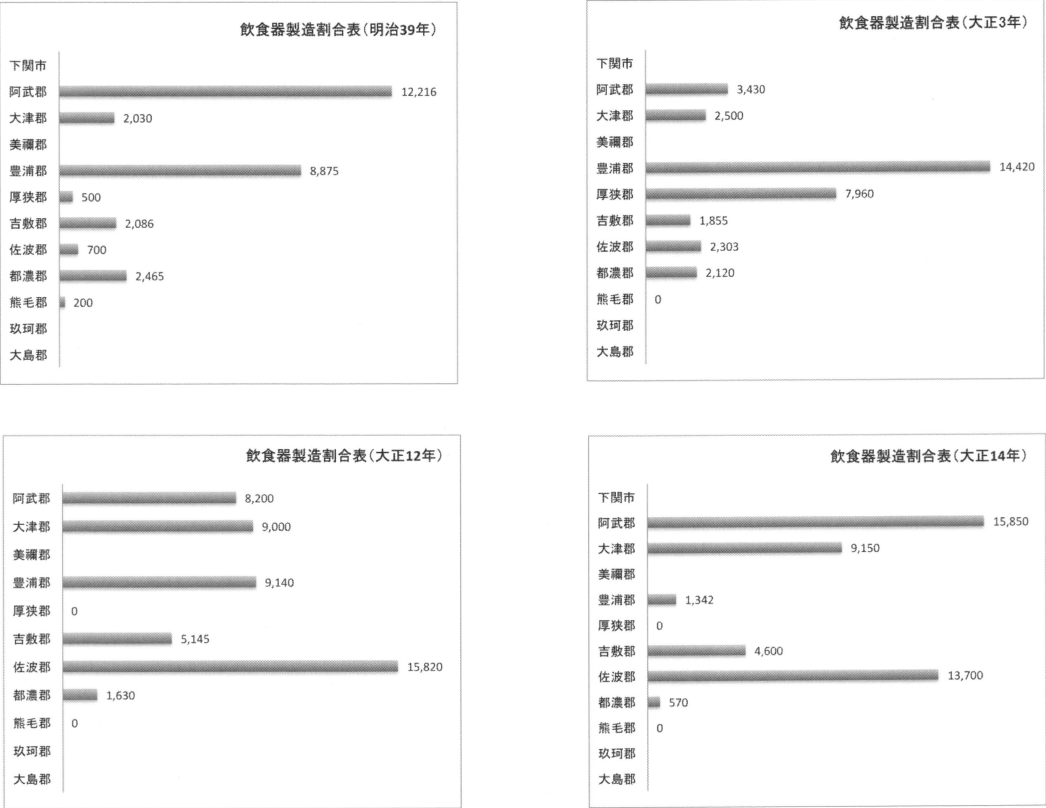


図 13 下関港陶磁器取引先比較表

年	品名	輸 入			輸 出		
		数量(トン)	価格(円)	仕出地	数量(トン)	価格(円)	仕向地
明治39年	陶器	68	4,550	大阪・県下・筑前・石見・三河・伊勢	504	3,696	北海道・九州・県下
	磁器	3,095	57,764	肥前・美濃・尾張・伊予・県内	2,505	50,100	北陸・北海道・九州・県下・韓国
大正12年	陶磁器	2,930	269,560	門司・大阪	3,510	322,920	門司・朝鮮各港
					不明	18,025	外国(不明)

図 14 下関駅陶磁器貨物一覧

年	品名	発 送					到 着			
		小口(トン)	貸切(トン)	合計(トン)	前年数量	運賃(円)	小口(トン)	貸切(トン)	合計(トン)	前年数量
大正12年	煉瓦	15	35	50	119	245	20	312	332	110
	陶磁器	41	7	48	67	309	298	268	566	526
	土器	—	13	13	6	108	33	31	64	11
	瓦	—	9	9	44	24	6	99	105	80
合 計		56	64	120	236	686	357	710	1,067	727

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

研究紀要

第8号

発行年月日	2013年3月
編集・発行	土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 〒759-6121 山口県下関市豊北町神田上891-8 TEL 083-788-1841・1842 FAX 083-788-1843
印刷	株式会社吉村印刷 〒750-0004 山口県下関市中之町5-9 TEL 083-232-1190 FAX 083-232-1189
